

知覺形而上學の問題

土井虎賀壽

『理性は如何なるひとも目立たない街道である』ヘーゲル

序 説

哲學の歴史を貫く原理は論理主義である。人間の歴史を「自由の意識に於ける進歩」と呼び得るならば哲學の歴史はまさしく「ロゴスの自覺に於ける發展」であると語られなければならない。これを範例的に見れば古代哲學史のロゴスの自覺をプラトーン・アリストテレスの論理學に見出し得る時、カント・ヘーゲルの論理學は近代哲學に於けるロゴスの自覺の進歩を象徴するものである。歴史の事實がまさしくさうである。そして吾々自身も亦哲學の本質が必然的にさうでなければならぬことを信じ、いささかの貢献をそれにむかつてなさうと務めつつあるものである。現實的なものはその故に理性的であり、理性的なるものはそれ故に現實的でなければならぬ。

このことは凡そ哲學的研究に刻苦しつつある吾々にとつて根原的な事實であり、又同時に原理的な確信であつてそこに問題の餘地はない。否、凡そ哲學的な問題はこのことを背景とした上で始めて充實した問題たり得るのである。併し乍ら哲學史の原動力であり且つ目標であるロゴスは如何な

る本質に於て把握されて來たのであるか。少くとも既にアリストテレースは明確にロゴス活動が感性 (*aiathros*) に起因するファンタシアによつて媒介せられることを説き、それ以來カントにあつても直観なくしては認識が空虚であるとよばれ、ヘーゲルの精神現象論は感性的直接性を出發點としたのであつた。即ちロゴスは感性の媒介に於て活動するもの、否むしろ自らを感性に媒介する媒介活動そのものがロゴスであると考へられ來つたのである。吾々はこの歴史的現實をその一應の現實性の故に理性的であることを承認する。併しこの歴史的動向は果してその充實せる現實性を實現したであらうか、少くとも實現の方向に進展したであらうか。吾々はこの問ひに向つては否定的解答を與へざるを得ない。何故かならば彼等、特に近代哲學者達はあまりにひたむきにロゴスに執着し、それ故に感性の單なる媒介契機性に固着したのである。ロゴスへの情熱が餘りに強調されてロゴスへの偏執に陥り、ためにその媒介活動が極めて稀薄になつたからである。凡そ執着は論理的には抽象的、自同律、即ち媒介否定に導かざるを得ないものである。生の側に於てこれが、これがと執着することとはロゴスの側にあつてこれだ、これだと自同性を主張することに外ならない。諸法皆空は無我執に對應し、諸法自性は我執に外ならぬ。ロゴスへの偏執はロゴスはロゴス自身に同じいといふロゴスの自同性に導き、他方に於て感性は媒介契機なるが故に單なる媒介契機である他の何ものでもないといふ抽象的思惟動機を生み出したのである。その結果は單なる媒介契機に過ぎず、それ故それ自

らの獨自なる本質をもたぬ感性によつて媒介されるロゴスは充實せる媒介でなく、従つてロゴスはロゴス自身に同じい抽象的自同性に墮したたのである。ロゴスが眞實に媒介されたロゴスであり、否實に媒介そのものであるためには、それ自らの本質をもち、それ故決して單なる媒介契機でない、感性に媒介されて緊張せる自己内還歸を遂行するものでなければならぬ。單なる媒介契機ならぬものに媒介されてこそ始めて充實せる媒介であり、そこにのみ充實せるロゴスが誕生するのでなければならぬ。故に近代哲學に於けるロゴスの發展は、その媒介的意圖を媒介否定的行動に於て裏切つたものであり、それ故眞實に現實的でなかつたし、又理性的でなかつたといはれなければならぬ。このロゴス偏執、感性貶謫の方向はもう一つ決定的な歴史的事實によつて更に拍車をかけられた。即ちプラトーンに由來する身體墓標説 (*body-soul*) の根強き傳統はロゴスを全く身體から切り離し、緊密に身體に結ばれてゐる感性を影の如き位置に追ひやつたのである。

吾々はロゴス主義に擔はれつつロゴス主義の歴史的實現に向つてその現實性への問ひを投げかけることによつて反つて否定的解答を得た。この解答は併しロゴス主義がロゴス自身に投げかけ、ロゴスの獲得したロゴスの解答でなければならぬ。ロゴスの自覺は常に歴史的傳統に擔はれつつ歴史的傳統に向つてきびしき批判を投げかけ、單なる傳統の必然性を自由性に轉換することの外にはないからである。吾々のロゴスの自覺は感性をその本質と獨自性に於て確立する動向に展開せ

られなければならぬ。^{(註(1))}

(註(1)) ロゴスの自覺は具體的には直接感性に媒介されるのでなく、その中間に言語が恰も推論に於ける中概念の如き役割を演ずる。ロゴスの自覺はそれ故に知覺、言語、論理の圓環的媒介活動でなければならぬ。

知覺の哲學的意味は知覺の形而上學の意味である。若し知覺が形而上學に於て占める位置が確定せられ、或は更に進んで知覺の形而上學性が明らかにせられるならば知覺はその存在理由を形而上學的に究明せられたといはれなければならない。若しかゝる試み乃至研究を「知覺の形而上學」と呼ぶことが許されるならばそれは恐らく次の三つの形態に於て考へられ得るであらう。

第一、知覺及び知覺の世界はその根を直ちに形而上學的世界に下し、それ故にその根本に於て形而上學的存在であると考へるのである。ある批評家がアンリ・ベルグソンの哲學を「知覺論の上に立つ形而上學」と稱したのはそれである。或はまた知覺の世界が成立するための原理的條件を求めて形而上學的假定に達する仕方である。マックス・シェラーが自ら「知覺の形而上學」と稱したのがそれである。この仕方はある意味に於ては勿論知覺の形而上學性を説くものと考へられ得るけれども嚴密に語るならば——むしろ知覺の背後の形而上學であつて決して知覺そのものの形而上學ではない。この際語られ得る知覺の形而上學性は知覺の背後から放射せられる背光に外ならない。知覺の背後

は知覺そのものではないが故に背光としての形而上學性は決して知覺そのものものではない。知覺そのものがそのものとして形而上學的光明を發する時に始めて充實した意味で「知覺の形而上學」が語られる。

第二、知覺はたとへ理性程に高くはないにしても兎に角一つの心理作用或は精神作用であるが故に單なる形而の世界 *physis* からは原理的に異つた性格をもち、それ故に形而上學的であると語られる。即ち知覺はその對象を單なる形而の世界にしかもたぬけれども、知覺といふ作用そのものは精神的、従つて形而上的であると考へるのである。恰もゲーテは決して形而上學の問題を研究しなかつたけれども、ゲーテといふ人間そのものは形而上學的存在であつたと語られ得るが如くである。併しこの仕方で語られ得る知覺の形而上學性は嚴密に言へば單なる無形而學性である。即ち形而的でないといふ丈けである。形而上學的であるといふことは、經驗的事實の斷片性に對して存在の全體性の謂ひである。存在全體性は本質的に經驗を超えて形而上學的なのである。形而的で無いといふことは形而上的とは異なるのみならず實に形而上性の否定である。何となれば知覺が形而的存在で無くそれと區別せられるといふことは知覺が存在全體でないことを意味するからである。故にこの第二の仕方は單なる無形而學性を説くが故に反つて知覺の形而上學性の否定であると語られなければならぬ。哲學並びに心理學の傳統的な解釋はこの仕方で知覺を理解する。

第三、知覺の對象は單に經驗的形而的でありながら、否、經驗的形而的であるが故に本質的に存在の全體を擔ふ。かくの如く考へられるに到つて始めて嚴密に知覺の形而上學が成立する。即ち第一、第二の仕方は、經驗的現象と區別せられた非經驗的存在として形而上的存在を考へ、従つてかかる形而上的存在は反つて有限な存在斷片でしかあり得ない。眞實に無限なる形而上的存在は經驗的現象を自らの外に排斥せず、むしろ經驗的現象に即し、經驗的現象のうちに澎湃たる生命を脈動するものでなければならぬ。吾々のこゝに問題としようとするのはこの第三の仕方に於てである。而して經驗的、斷片的存在が、超經驗的、全體的存在を擔ふことは象徴に外ならないが故に、吾々の問題は知覺的存在の象徴性を明らかにせようとするにありと云はるべきである。註(1)吾々はその際忠實に知覺の事實を見てゆかうとするのである。吾々はロゴスの媒介性を充實せしめる動機の下に知覺そのものの存在理由を見てゆかうとするのであるから、決してロゴ斯的に何ものをも考へこまない、やうに注意しなければならない。知覺そのものの存在理由は知覺の本質そのものに従つて純粹に見る、立場に於てなされなければならない。而して知覺の事實を忠實に見ることは當然に知覺の構造の問題を媒介として進まなければならない。知覺の對象は知覺のエネルギーに於てのみ見られるからである。かくて吾々の問題は第二の仕方に於ける知覺のエネルギーの問題を含み、そして恐らくは第一の仕方の問題をも解かなければならない。換言すれば吾々の問題は第三の仕方を樞軸と

して第二、第一の仕方を包括した知覺形而上學の問題を形づくるのである。

註(1) こゝで象徴(Symbol)と呼んだものは一般に比喩(Metapher)と呼ばれるものとの對立に於て語られる。「比喩」はあ

る特殊な事柄と他の特殊な事柄とがその各々もつ性格上の類比(Analogie)によつて結ばれる時に成立する——この點で單に隨意的に或るものを他のものの記號(Zeichen)とするやうな場合と異つて、二つの事柄の類比性が結ばれれば媒介根據にせられてゐる。従つて比喩で結ばれる二つの事柄はその各々の内容が比例的(platonischer Logos nach Steiner)でありさへすればよいのであつて、決して實在な聯關を必要としない。ステンツェルによれば比即ちロゴスは現代心理學に於ける『形態』(Gestalt)に外ならないのであるから、比喩的な事柄は形態を等しくすることで充分であつて、例へば因果關係のやうな實在的聯關には全く係はりをもたない。これに反して象徴は決して單に内容的な形態的聯關でなくて、實在的聯關、否實在的合體を根據とする内容的聯關でなければならぬ。象徴にあつて結ばれる一方のものは特殊的經驗的事實であり、他方は全體の從つて形而上的實在であるが故に、前者は後者の實在性に支へられ、後者は前者の現實性に於て生き、二者相入的に一つのリズム的形態を現前する。最も著しい例證として『古事記』中卷に載せられてゐる伊須氣余理比賣の御歌を分析しよう。

狭井河よ 雲起ち互り

畝火山 木の葉喧擾ぎぬ

風吹かむとす

この御歌は古事記本文の説明によれば、伊須氣余理比賣がその三柱の御子達に向つて彼等にさし迫つて來た危難を告げしらせたものである。若しこの本文の通りにこの御歌を理解すれば、これは特定の場所と特定の時に起らうとしてゐる歴史的事實としての危難の喧擾性を、たまたま今眼前に見た特定の自然現象の喧擾性と比喩的に結ばれたに過ぎぬものである。勿論この際この二つの喧擾性は單に内容上類比的であるに止まつて、この特定の人事現象とこの特定

の自然現象との間には實在的聯關はない。實在的には偶然な (случайная) (случайно) 二つの事件がたゞ内容上形態上の類比の故に主觀的に結ばれ得たに過ぎぬ。客觀的には偶然に同伴隨行する二つの事件が作者の主觀に於て主觀的に結ばれたに止まる。然るにこの御歌を「古事記」の本文から切り離し、従つて歴史的背景から切り離して純粹に藝術作品としての一首の歌と見れば光景は一變する。この時吾々の前に展開されるものは、既に齋藤茂吉が注意したやうに、類稀なる象徴の世界である。それは遙かなる狭井河の邊りから大きく立ちひろがりつつ畝火を目がけておし寄せて来る風雲の大群、そのけはひを既に梢に感受してさはさはとささやきはじめた木の葉、その木の葉の動きに思はずつりこまれた人間の眼の働き、——全體にみなぎる大自然の動きとそれを感應する人間の氣持の動搖。これが語句の律動と語音のひびきに於て感覺的に形象されてゐる。そこには他の特殊な事件を類推する間隙などの微塵もない切迫した衝動が高く低く波うつてゐる。この短歌にあつては人間をも含んだ大自然の律動そのものが直接にその感覺的言語律動を喚び起して來たのである。天雲の動きも木の葉のささやきも、狭井川も畝火山も、またそれを見守る人間も、否それを表現する言語そのものまでが、各自の個と特殊性に於て大自然の動搖を動搖してゐる。各個は個でありつつ全であり、全は個の各々に於てさはさはとなつてゐる。個にして全を動き、全にして個を生きる象徴の歌で、これはある。象徴に於ける實在的合體といふのはかくの如きものを指すのである。併し乍らこの御歌を「古事記」の本文から切り離す藝術的鑑賞は歴史的典據を遊離する限り抽象的である。眞實なる藝術は歴史的事實を自らの内に孕むのでなければならぬ。従つて又眞實なる象徴は歴史的、事實を内に擔はなければならぬ。吾々はこの歌を決して古代人の單なる寫生の歌とは見ないで、矢張り伊須氣余理比賣の御歌として、而もあの特定の事件を前にして特定の心境に立たれてゐる皇后の御歌と理解しなければならぬ。即ち皇后は既に御子達の危難を豫感せられて兎もすれば鳴り始めやうとする心臓をいたはりつつたまたま畝火の山上に立たせられた時、大自然の動搖が天啓の如く皇后の宇宙像を充したのである。皇后の心臓が漠然として内に鳴つてゐた宇宙的不安が山上に立つた時明確な大自然の不安の形で皇后を捕へたのである。皇后の御身にとつて御子達の危難は正しく宇宙全體の危難でなければならぬ。これが大自然の喧擾性

に於て天啓として皇后の宇宙を震撼せしめた時おのづからにして成り出でた御歌がこの象徴の御歌に外ならなかつたのである。大自然のこの天啓を象徴の歌たらしめるには皇后に於けるが如き獻身的危惧を動搖する心境の感應を豫想するのであつて、單に客觀的な寫生ではあり得ない。單に「外」から喚び起される感應でなく、「外」と「内」との相互喚起的感應、相互轉換的合體でなければならぬ、こゝで明らかめようとする「知覺的存在の象徴性」は正しくこの内外の相互喚起的感應、相互轉換的合體でなければならぬ。

二

吾々はアリストテレースの一つのテーゼから出發したいと思ふ。即ち、眼、覺、め、て、ゐ、る、といふことは、アイ、ス、テ、ー、シ、ス、が、エ、ネ、ル、ゲ、イ、ア、に於てあることだといふことである。覺醒といふことと知覺が現實に働きつつあるといふこととは同一である。知覺を現實態に於て把へようとすれば覺醒といふ事實の構造を明らかにしなければならぬ。然らば覺醒といふことは如何なる事實を指すのであるか。^{(註(2))}

先づ第一に考へられる、そして又考へられなければならないことは覺醒が眼り或は夢に對立する事實たることである。否、現に眠りから、或は夢から、眼覺めるのである。覺醒は概念上或は本質上、夢並びに睡眠を前提するのみならず實に發生上、夢並びに睡眠を豫想する。故に覺醒といふ事實の構造を明らかにするにはこの兩者との本質的差異を明らかにするのみならず、兩者からの發生的由來を究明しなければならぬ。併し更に考へ合はされなければならないことは、覺醒そのものに本質上並びに恐らくは發生上區別せらるべき種類並びに段階が見られることである。例へば覺めてゐなが

ら夢見ごころであることがあるかと思へば、例へばまた佛者の覺悟に比せられるやうな覺醒がある。それ故覺醒そのものに本來的なものと然らざるものがあるといはねばならぬ。吾々は覺醒の本質的な性格を把握するために先づ吾々の一般に感性的な生活を發生的に理解する必要に迫られる。

註(1) アリストテレスに於けるアイステーシスは勿論廣義に感性として理解せらるべきものであるけれども、後に明らかにするやうに感性の最高段階が知覺と呼ぶべきであるから今は感性一般を代表するものとして「知覺」と譯したのである。

註(2) 覺醒の問題はそれだけで一つの重要な哲學的課題である。ヘラクレイトスに於てこの問題が占める中心的位置を想ひ起すべきである。そしてこの問題の最後の解決はヘラクレイトスに於てさうであつたやうにロゴスの問題として始めて成立するであらう。こゝではたゞそれへの前階に於て知覺の構造分析に對する地平圏として役立てようとするのである。覺醒は自覺並びに實在意識に外ならぬが故にこれを水準として知覺的象徴に於ける自覺と實在性とを究めようとするのである。拙稿『ヘラクレイトスの人間解釋』(宗教研究一月號以下)參照。

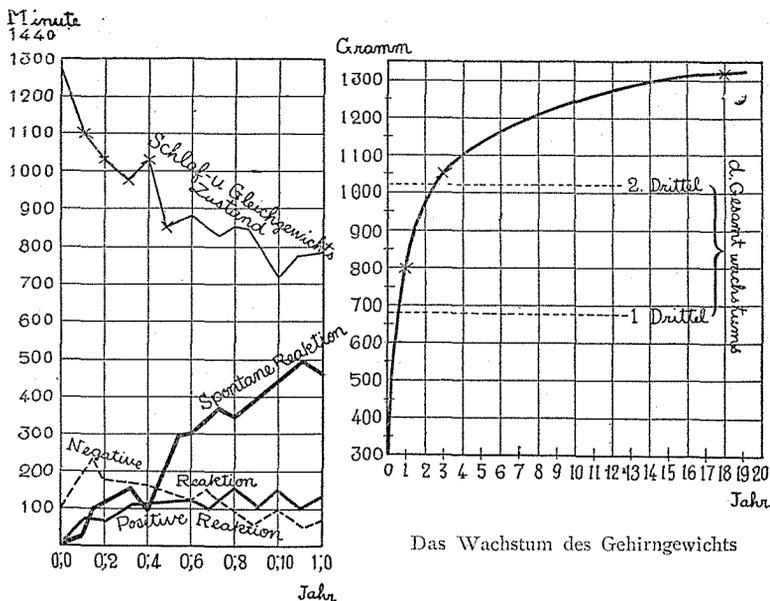
感性的生活を發生的に見るに當つて吾々は心理學方法論の問題にゆきわたる。成人の體驗は自己觀察の方法によることが出来るけれども、他人の意識或は更に小兒、動物の體驗の如きに到つてはこの直接的方法によることが出来ない。そこで色々な方法が採用されるのであるが吾々は可能的なあらゆる方法を嚴密な批判の下に活用しなければならない。第一は解剖學的研究及び生理學的研究からの推理であり、第二は表情、表現、態度の直接的理解である。小兒の研究に於ては特に所謂『日記法』が最も効果的であるとされてゐる。かくの如き方法によつて嚴密に研究せられた結果、吾々

人間の少年時代は三つの劃期的な年齢をもつことが報告されてゐる。即ち初生兒に於ける誕生期が出發點となり、第二の劃期的年齢は二歳から三歳の間に置かれる。この第二期に於て吾々人間の精神的並びに身體的活動の凡てが悉く萌芽的には實現せられるのである。そしてこの時期から直ちに青春期に飛躍するのである。

胎兒が母胎に宿つて九ヶ月目即ち誕生の直前に於て如何なる經驗をもつかについて、權威ある生理學者たちはそれが吾々の深い眠りに酷似すると記述してゐる。この深い眠りの體驗は次のやうにいはるべきであらう。外界からの刺戟が直接に來ないで、而も母胎から來る刺戟は九ヶ月の間慣れ親しんだものであるから、胎兒の**にぶい**體驗は身體諸部から來る**にぶい**感觸であらう。勿論身體諸部から來る感觸は決して元子論的にきつぱり分れた切れ切れのものでなく、全體的に融け合つた生理的ゲシタルトをなす**傾向的な**感觸の波であらう。身體諸部から來るこれらの感觸の波は互の傾向の均衡に於て安らひ、或は恐らく**にぶくとけあつてこゝ**に一つの全體的生命の調子 (Der Ton des totalen Lebens) 即ち氣分 (Stimmung) が形づくられる。この生命の調子即ち氣分をゲシタルト的に成り立たせる諸々の波動はそれ故にいふまでもなく内部觸覺的感觸 (Affektion der inneren Tasts) であると語らるべきである。胎兒は受胎以來急劇に實に驚異的な身體的發育を遂げるのであるから、身體諸部から來る傾向的な感觸の波は少くとも生理的には相當大きい**うねり**を見せるであらうけれ

ども、九ヶ月後には發育もほぼ完成して全體的生命の調子は極めて平穩な、いさゝかの小波もたない状態でなければならぬ。誕生直前の胎兒の體驗が深い眠りに酷似するのは當然でなければならぬ。

扱てかゝる生命の調子をもつた胎兒が誕生した瞬間に如何なる體驗が成立するか。ヘーゲルによれば誕生に際して勇敢なる生聲を擧げるのは人間丈けであつて、それは啞の如く生れ出でる禽獸と區別される理性的生存權の發言である。この考へは、人間の直立歩行が理性の象徴であると見る考へ方と共に相當の事實的根據をもつことは後の吾々の敘述から明らめ得ると信するのであるが今はこの問題を一應除外する。十ヶ月の間住みなれた環境から突如として全くの新天地に投げ出されたのであるから、若し胎兒が吾々に近い感性活動を營むものであれば立ち所に絶息しなければならぬ。然るに初生兒の解剖學的研究によれば、小脳部は完全であるけれども大脳皮質は神經細胞があるのみでそれを連結する器官が缺けてゐる。即ち脊髄或は小脳を経て大脳皮質に到る感覺傳達の路は、觸覺、筋覺、嗅覺、味覺の部分丈けが成り立つてゐて、聽覺及び視覺の部分はづつと後になつて始めて成立する。又大脳皮質から發する運動體系は極めてかすかな成熟に過ぎず腦髓諸中心部の間の連絡はその痕跡さへもない。従つて初生兒の體驗は客觀的刺戟に對して極めてにぶい反應を示すといはなければならぬ。その故にこそ誕生といふ大事件に堪へ得るのである。而も初生兒はこ



Das Wachstum des Gehirngewichts

の、ふい、反應、だけ、で、實、に、驚、く、へ、き、疲、勞、を、示、す、も、
 の、で、あ、る、。

初生兒は一日の大部分を眠りつづけるのであつて、覺めてゐる時もまどろみに近い。今第一期即ち二歳に到るまでの變化發展を圖示すれば上の如くである。即ち生れたばかりの初生兒は一日一四四〇分の中一三〇〇分は眠り、外的刺戟に對して愉快的氣分反應 (positive Reaktion) を示すことも、また自から身體を動かすことも (spontane Reaktion) 殆んどない。たゞわづかに外的刺戟に對する不快な氣分反應 (negative Reaktion) を一〇〇分だけ示すに過ぎぬ。換言すれば覺めてゐる一四〇分ばかりの大部分をにふい不快感で充してゐるのである。而して刺戟に對して不快感を抱くのは成人に於ても疲れの

特長であつて、初生兒の覺醒は倦怠そのものであり、又出来るだけ刺戟なき平穩即ち眠りを欲するのである。この不快反應の量即ち眠りへの慾求量は生後一ヶ月で頂點に達しそれ以後は急減して六ヶ月以後に於ては反對の愉快反應にうち負かされてゐる。そしてこの六ヶ月前後に於て自動反應が同時に急劇に増加してゐることが注意せられる。これらの事實は何事を示してゐるか。

吾々は解剖學的に成熟してゐることが確かめられてゐる初生兒の觸覺についてその構造を分析して見よう。觸覺はアリストテレス以來最下級の感性と見られてゐるものであつて乳兒の初期に於ける感性は觸覺が主要部を占めてゐる。従つて初生兒が外的刺戟に對して示すにふい不快反應は觸覺的なものでなければならぬ。^(註1) 扱て最初の外的觸覺は今まであつた生命の全體的な調子を地(Grund)としてその上に浮び出た特定の感觸的調子を示し、一つの感觸の型(eine bestimmte Figur der Affektion)を形づくらうとする。一般にこの地と型とは決して單なる和でなく二つの傾向或は力の均合ひとしてなりたつのであるが、疲勞した條件のもとでは互に融け合つて一様性(Uniformity)を成立させ、活動的な精神状態の下では出来るだけ互の特異性を維持し従つて出来るだけ分節^{アルテリスリット}された諸力の緊張的平衡を形成する(Maximum- and Minimum-Principle, Koffka)。初生兒は倦怠そのものであるからこの外的觸覺は直ちに全體的調子に融け入る傾向に動き、従つてまどろみに似た覺醒を成り立たせるに過ぎない。この際若し外的感觸が餘りに鋭い調子を示し、従つて地の調子との間に

新しい全體的な調子を生み出すことが出来なくなれば不快は苦痛、苦惱の感動を生じ、極端に達すれば生命そのものを破壊するに到る。アリストテレスが語つたやうに觸覺の破壊は單に感性器官のみならず生命體全體をこはすのである。たゞ初生兒の感性能力は極端に、ぶいから普通の條件の下ではこのやうな破壊は起らない。シェラーが植物に許した感情衝動(Gefühlsdrang)は、若しそれが正しく許されるとしてもこの感觸の段階に止まるのであつてそれが如何に抵抗 Widerstand にぶつつかつてもそれは決して外なる何ごとをも語らずしてたゞ内なる身體的な外的感觸が鋭い調子を示すといふに止まる。即ちこの感觸の段階は、たとへ客觀的事實としては外的刺戟に係はるとしても、體驗そのものとしては全く身體的生命そのものの調子の關係としてのみ成立する。

註(1) 觸覺とほぼ同時に成熟してゐる嗅覺及び味覺はその成立過程から見ても觸覺の特殊な形とも見られ得る上に、初生兒にあつては決して獨立した感性として働いてはゐないのであるから、——初生兒の感性を觸覺によつて代表させて論ずることは充分に批判的であるといはねばならぬ。

然るにかゝる倦怠期が生後一ヶ月から順次下り坂となり六ヶ月前後に於て積極的反應即ち愉快反應によつてうち克たれるといふことは何を意味するのであらうか。それは乳兒が漸次に力の緊張を喜ぶに到つたこと、即ち活動そのものを欲するに到つたことを示すのである。即ち外的刺戟から來る外的感觸の調子が地の全體的調子と緊張した均合ひを保ち、前者が明確な型として浮び出ることを欲するのである。この頃の乳兒が手に觸れる限りのものを直ちに口に運ぶのは決して盲目的な食

慾のためではなくて、乳兒にとつて殆んどたゞ一つ鋭敏な觸覺の焦點を合はせるためである。即ち乳兒の手に於ける觸覺はそれ程敏くないのであつて、その故に最も觸覺に鋭敏な唇へ運ぶのであつて、それは恰も網膜の黃點へ焦點を合はせるのとアナログである (Bühler)。乳兒がかくの如く單なる食慾のためでなく、感觸的型の成立、感觸の方の緊張を喜ぶに到つたことは、^{註(1)} 同時に起る自動活動の激増と共に遊戯の萌芽を示すのである。即ちこの頃の乳兒はむやみに手足を動かしたり、べちやべちや口を動かして所謂 *Talimologie* をやるのである。これらは何等の目的なくして、たゞ活動することそのことの喜びである。この活動快感 (*Funktionslust*) は満足快感 (*Befriedigungslust*) から嚴密に峻別せらるべきである。慾望満足の活動は不快感から出發して満足快感に到るのであるが、満足快感に到達するや否や活動は休止し、新しい活動は反つて制限せられるのみならず満足快感も成り立つ瞬間からにぶり始める。活動快感はかゝる慾望満足といふ實際的目的に係はりなく純粹に活動そのものに内在するところの活動動力である。そしてかゝる活動快感から起る行動が遊戯に外ならない。而して遊戯は乳兒に於てのみならず動物にも見られる。犬ころどもがじやれあつたり、猛獸がかみあひの眞似事をすることは周知の事實である。よき騎手を得た馬の疾驅はこの活動快感そのものであるといはねばならぬ。それ故人間の身體を功利的行動の道具と解釋し、従つて知覺をも單に功利的にのみ理解するベルグソンの知覺論は既にこの感性の最初の段階たる感觸に於

て破られたといはなければならぬ。

註(一) 勿論この活動快感に基く積極的反應に於ても餘りに極端な強い刺戟は反つて不快を喚び、又生命體を破壊する。感性が「中」(Mitteln)に於て成り立ち、且つそれは「中」なるが故に常に必ず「快」(Guten)である。とアリストテレスが主張するのはその謂ひである。

感性發展の第二段階は單なる生命の調子の關係である感觸に媒介されつつそれから一步出でて特定の像(Bild, Image)が結ばれる時に成立する。吾々はこの像を結ぶ活動を直覺(Intuition)と呼ぶ。勿論この直覺像は視覺に於て最も典型的に成立するのであるが感觸にあつても決して全く缺けてはゐない。例へば手の上に一定の重さの鐵板が乗せられる時、重さの感觸が全體的生命の調子を地として一定の高さの調子を浮び上らせると共に、鐵板の形に似た形の像を、而も一定の重さをもつた形の像を結ぶ。吾々は感觸に於て感觸の側に生の調子として感ぜられる重苦しさ、と直覺の側に結ばれる重い形とを區別しなければならぬ。あらゆる感觸は皆悉く——味覺及び嗅覺を除いて——感觸と直覺との二重性格即ち兩極性(Bi-polarität nach Katz)をもつのであるが、感觸は前者に傾き、視覺は後者に傾き、聽覺がその中間に位する。^{註(一)}而して重い形はそれ自らとしては直接に生命の調子に係はらない中性的なものであつて、この際に生れ出ようとする感觸の側に於ける全體的な生命の調子の上に非感觸的型(unaffektionale Figur)として浮び出るのである。重苦しい調子は感觸なる

が故に直接に、元の全體的生命的調子とつらなり一つの均衡に溶け入らうとするのであるが、重い形は非感觸的なものとして直接に元の生命の調子とつながることなくそれだけ全感觸的地から浮き出る傾向を大きくもつ。感觸的な型が常に多少曖昧であり、直覺的な形が明晰なのはその故である。註(2)併し元來が重苦しさの感觸によつて媒介されることによつてのみ重い形が成立するのであるから、若し前者が直ちに元の生命の調子に溶け入つて了ふやうなことがあれば後者も亦間もなく消失する。故に六ヶ月前後の乳兒に於ける活動快感によつて感觸的型が分節されることは直覺像成立のための先決條件である。のみならず重苦しさの形の重さとは本來的に相接しつづ前者が後者を媒介するのであるから、勢ひ形の重さの中心に感觸的な重さが流入し來る。この二つが如何に相近迫してゐるかは次の事實を見ても分る。例へば鐵板が極端に重い時には重苦しさの調子の代りに痛みの調子を喚び起し、従つて感觸の場そのものが元の全體的調子の上に鋭く痛みの調子を浮き上らせ、反つてそれに媒介せらるべき形の重さを形象せしめることなくそれを自らのうちに奪つて了ふ。即ちこの際直覺の側に残るものは高々形のみで二重の重さは一つの痛みになつて了ふ。即ち直覺の重さと感觸の重さとは二にして而も一なのであつて互に貫入交流してゐるのである。而して形は直覺の重さを中核として成り立つのであるから、重い形の中核に感觸的重苦しさが流入してゐることは當然である。吾々はこの直覺像の中核を成す性格を感觸的性格 (affektionaler Charakter) と呼ぶ。この感觸

的性格が直覺的性格の中核を形成することは觸覺に於てのみならず聽覺に於ても將又視覺に於ても確かめられるところである。たゞ觸覺にあつては感觸の側が優位を占め、視覺にあつては直覺の側が逆に優位を占め、聽覺にあつては「中」を得てゐることから來る比較的な相違を來すのみである。

註(1) 視覺に於ける兩極性に關してはメツツゲルが「霧の知覺」の實驗の途中で興味ある結果を報告してゐる。最初眞暗だつた暗室全體を徐々に段々明るくしてゆくとき先づ最初に何だかほつとした明るい氣持になる。この明るさは重い氣分に對するほつとした軽い氣持である。扱てその後直ぐに感覺的な明るさ、即ち暗さに對する明るさが意識される。この氣分的或は印象的明るさと、感覺的或は「白さ」としての明るさの區別、及び前者が先づ現はれて後者を媒介的に準備してゐることは注意せられなければならない。而もまた言葉としては同じ言葉「明るさ」が使はれてゐること、言葉の上で兩者を區別することが極めて困難なことも留意せらるべきである。否、例へば獨逸語で氣分的「hellig」と感覺的「hellig」が交互に流用せられることさへ見られるのであつて、兩者が二にして一、一にして二であることは敏感に言語が反映してゐるといはねばならぬ。

註(2)

感觸面はそれだけでは極めて曖昧な型をしか成立せしめず、それが明晰になるためにはそれによつて媒介せられた直覺像が逆に感觸面を媒介しなければならぬ。それ故に純粹に感觸的な記憶は極めてにぶい氣分を喚起するのみで殆んど捕捉し難い。それ故にメン・ド・ピランは純粹感觸的記憶の不可能であることを主張した程であるが、併し一般に記憶の成立には感觸面が極めて重要な役割をもつてあつて、それは直覺面との相互媒介に於て記憶成立の基礎をなすものである。而して感觸面がそれだけでは極めて曖昧模糊としてゐることは後に感觸的言語として告知言語を論ずる際、外界の事物に係はり従つて直覺像に媒介された告知言語が多少の程度に分節されて來るにつながらる事柄である。

感觸と直覺とが獨立すべき二方向でありつつ一が他に交流することは更に今一つの過程によつて

更に促進せられる。外的刺戟に對して生命體が「單なる生活」(simple life)の爲に交渉する仕方は直接には、感觸の側に存するのであつて直覺の側には存しない。「單なる生活」とは外界から食物を吸収して營養と生長とを計ることである。それ故に直接に食物を採り入れる役割をもつ味覺はたゞ感觸的であるのみで決して直覺的ではない。嗅覺も亦直接味覺に密接し、且つそれは味覺の場合の如く外的刺戟が實質的に化學變化を起し或る意味に於ては既に身體化されて後に成立する感性である。これに反して直覺の側は直接には、單なる生活ならぬ「よき生活」(good life)の故に成立するものである。即ち直覺像はその中核を感觸的性格にもちながら一應單なる感觸的生命の外に型として浮き出したものであつて直接に感觸的生命とつながるものではなく、従つてまた直接に單なる生活のためものではない。直覺像はかくして一旦感觸的生命全體の外に出でつつ、而もなほ間接に再び感觸的生命の全體に係はり、生命體の調子を促進したり或は阻害するのである。カントの所謂無關心的、美的効果はかくの如く直覺像が一旦感觸的生命を離脱しつつ再び間接に形相的な係はりを生命體に對して採る時に成立するのである。勿論この際直覺像は一旦感觸的生命との質料的交渉を斷つた限り無關心的と呼ばれてよいのであるが、併しその兩端に於てはあくまで感觸的生命と交流するのである。即ち直覺像の成立因縁の故に感觸的性格は直覺像の中核を占め、美的効果に於て感觸的生命そのものに交渉する。たゞ感觸的生命から一旦純化され、間接的に交渉して「よき生活」たらし

めることに於てのみ無關心的であつて、決して絶對に生命體を超える絶對的な無關心ではあり得ないのである。^(註1)

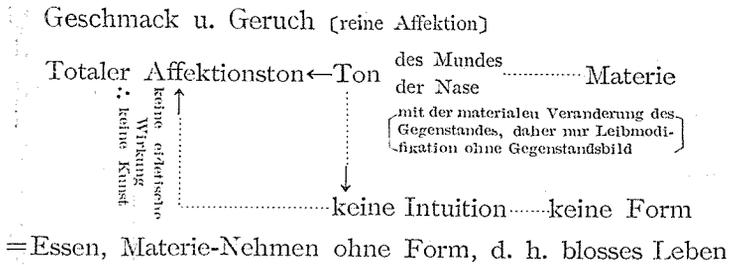
註(1) カント美學は藝術を無關心性の故に實生活から隔離せられる一面性に於てのみ把へる。それ故に繪畫の額縁は、作品を實生活から切り離す絶縁體でなければならぬ。無關心的永遠を眺めるための窓でなければならぬ。併し額縁は絶縁體として薄弱であるのみならず、それだけでは理解出来ない性格をもつてゐる。ゴッホの作品とデュレルの作品とを隣り合はせに或は額縁を全くくつつけて見よ。明らかに二つの作品は額縁を超えて作用し合ふ——或は對照的に、或は相殺的に効果を及ぼし合ふ。のみならずもし額縁が絶縁體であるならば作品は部屋のどの位置に置かれてもいゝことになり、極端に云へば街頭の電信柱にくつつけてもいゝことになる。絶縁の使命は絶縁の半面に結縁をもたなければならぬ。額縁は作品を他から區切つて統一させると同時に、統一された作品を他の文化現象及び一般に他の人生に關係させ、その作品にふさはしい位置づけの媒介となるものである。

かくの如く直觀像が形相として生命體の全體の調子に觸れて成立する効果は矢張り一つの感觸的生命の調子に外ならないのであつて、而もそれは實にアリストテレスのいへるがやうに『質料なくして形相をうけとるアイステーシス』であると語られなければならない。かくの如きアイステーシスは實に本來「よき生活」の故のもの、藝術的アイステーシスであると語られなければならない。直覺像を最も純粹に成り立たせる視覺は本來繪畫の故のものであり、最も濃厚に感觸的性格を流入しそれ故にまた最も感觸的な形相効果をもつ觸覺は本質的に彫塑家のものである。而して判明なる視覺的效果と沸騰せる感觸的效果とを「中」に於て交流統一せしめる聽覺は本質上音樂的であると語られな

ければならない。勿論かくの如き「よき生活」を本質とする直覺像を「單なる生活」の爲に間接的に利用することは許さるべきことである。それは「よき生活」のよさにより優しく許されてある。それ故また逆に「單なる生活」は決してその間接的利用を直接化することなき義務を負はされてゐるのである。

本來なるアイステーシスはかゝる形相的效果による感觸なるが故に亦逆に直覺そのものの中核をなす感觸的性格に形相感觸的效果を及ぼし、かくて直覺像の中核は形相感觸的效果によつて形相化せられた感觸的性格を成り立たせる。即ち重い形といふ直覺像にあつて、最初にはこの重さの中核に感觸的な重さが直接的に流入して感觸的性格を成り立たせてゐたのみで形そのものには未だ直接には感觸性が混つてゐなかつた。然るに形相感觸的效果が矢張り一つの感觸性なるが故を以つて再び直覺像の中核に流入するに到つては重い形が二重の形相感觸性を得る。先づ第一には重さの中核をなしてゐた質料感觸的性格が更に内から形相感觸的效果によつて緊張せしめられる。第二には重さによつて媒介されて成立してゐた形、即ち直接には感觸性に係はらなかつた形そのものが、形相感觸性を獲得する。かくてそれ自身としては中性的であつた形はそれ故に最初はたゞ受動的に重さに媒介されるに止まつてゐたものが、今や形相感觸性を獲得することによつて内に形相感觸性を孕む重さの質料感觸的性格と内面的につながり——かくてこゝに重さの質料感觸性と形の純粹形相

的感觸性との間に一つのゲシタルト的均衡が成立しようとし、**重い形**が本來的に一にして同一なる質料・形相感觸的全體たるに到るのである。**重い形**の全體が一つの統一的な感觸的調子を成立せしめる。この際若し**重い形**が同時に**硬さ**の質料的感觸と結合してゐるやうな場合には、勿論純粹感觸の側に於て**重苦しさ**と**こはばり**とがゲシタルト的に均衡して他の全生命的調子から浮き出す傾向をもつと共に、直覺像の側では**重さ**と**硬さ**とが**重苦しさ**と**こはばり**から成り立つゲシタルト的均衡を感觸的性格として中核的に統一せられて形を媒介し、従つて形相感觸的效果の後には**硬重なる形**が質料・形相感觸的全體として成り立つ。吾々が**事物像** (Ding-bild, Thing-image) と呼んでゐるところのものは本來かくの如くして成立してゐるのであつて決してそれは例へば**硬さ**と**重さ**と**形**との偶然的な結合ではない。^(註¹)ヘーゲルが物は諸性質が單なる追加の關係 (Auch-Vehältnis) によつて結ばれてゐると解し、その故をもつて物知覺が止揚せられると考へたのは序説に述べた悪しきロゴス主義のために知覺の具體的構造を見ることが出来なかつたためである。視覺的直覺像にあつては、直接的な質料的感觸性が微弱であるに反して、間接的な形相的感觸性が遙かに強大であることに於て觸覺的直覺像と著しい對照を成してゐる。視覺的直覺像が形相的感觸性を主力とし、觸覺的直覺像が質料的感觸性を動力とするに對して、聽覺的直覺像は兩者の均衡に於て成りたつ。書かれた言葉と話された言葉との感觸の相違及び人生に於ける役割の相違は本來言語が視覺性と觸覺性との中を得

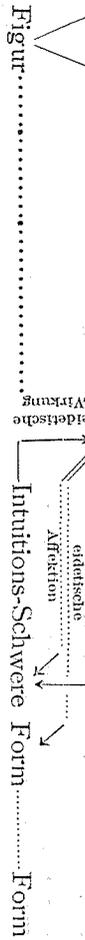


て成立することから由來する。更に亦直覺像一般のもつ感觸性は子供の遊戯が決して技巧的な擬人化によるのではなく、又單なる遊びででもなく、子供にとつて本質的に自然な、従つて嚴肅にして眞面目な行動であることを理解せしめる。

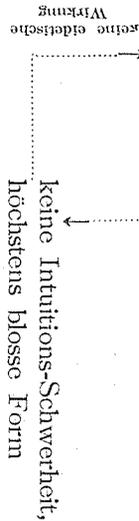
吾々はかくして特に子供の直覺像が直覺的であるよりも多く、感觸的氣分的であることを理解することが出来るのであるが、それは全く比較なのであつて、成人と雖も未だ全く受動的なこの感性段階にあつては直覺像の本來的な判明性は原理的に成立してゐない。この段階は單に質料的氣分を本質とする感觸 (Affektion) の段階から一步出でて一應直覺像に媒介せられることによつて形相的氣分に高まつたものであるが故に吾々はかゝる感性を感、覺 (Sensation, Sinnesempfindung) と呼ぼう。Sense といふ言葉は一方の側では Sentiment になつて感觸性を擔ひ、他方では所謂 Sensation の直覺性を擔ふ。Sinn も亦感性的受動性と意味的能動性とを合はせてゐる。ゲンタルト心理學の出現以後ヒュームの感覺概念は最早や歴史的になつたのであるから、吾々は感觸性が一步自らを出でて直覺性に媒介せ

Sensation = eigentlich künstlerische Wirkung, Form-Nehmen ohne Materie

Tast Grund..... Totaler Affektionston ← Affektionston der Hand..... Materie



← Scharfer Affektionston..... Materie



られたこの感性段階を感覺と呼ぶことを許されていゝと思ふ。感覺的感性の構造は右の如く圖示出來よう。——味嗅二覺は感覺的でなく感觸的であり得るのみである。

註(1) この硬さ、重さ、及びそれに媒介された四角の形の力學的均合に於て、勿論三者が同じ力勢を以つて均合ふこともあるし、又その何れかが特に優勢を占めた均合も起る。「雷鳴」にあつて特に「音響の脅威的感觸性」が優位を占めるが如くである。極端に出鱈目な人工品の感覺にあつてはこの力の均合が微弱であつて云はば類落した感覺像をしか結ばない。

かくの如き直覺像の成立によつて吾々の體驗は感觸的生命的調子即ち氣分から一步出でて外なるものを含む立體的構造を示したのである。即ち内世界存在 (In-der-Welt-Sein) としての人間が一應誕生したのである。感觸の段階にあつては特定な生命の調子が浮き出ることによつて一應覺醒

Herrschaft über eigenen Körper

Alter	Nicht-zentral gesteuertes Geschehen	Zentral gesteuertes Geschehen	Summe
0;0	84	16[Saugen]	100
0;3	54	46	100
0;6	43	57	100
1;0	22	78	100

知覚形而上學の問題

の誕生があつたのであるが未だ外なるものは成立しなかつた。外の誕生によつて覺醒は單なる平面性から立體性に高められたといはなければならぬ。併しこの立體性即ち直覺像の成立は、先にも述べたやうに活動快感に動機づけられた身體の運動を豫想する。運動に媒介されることなくしては直覺像は極めて不完全でしかあり得ない。即ち觸覺についていへば物體面の平滑さと粗雑さの感覺の如き手を動かすことなくしては全く不可能であり、形の如きも手の運動なくしては明確を期し得ない。のみならず身體の運動は諸々の感覺を連絡する媒介となる。今觸覺の發展段階を辿るならば、最初初生兒は手を衝動的に動かすのであるが未だ殆んど觸覺を生せないが、次いで偶然唇に物が觸れると愉快な感觸を生じ、第三には手に觸れたものを口にもつてゆく運動、第四には視覺に映つた物を能動的につかもうとするに到る。この第四段階に到つて諸感覺の結合が成り立ち直覺像は完全に明晰さを得る。この段階即ち神經中樞に統一された運動によつて媒介される諸感覺の統一を示す觀察結果は上の如くである。アリストテレスの共通

感覺の成立過程である。

吾々は今活動快感に基づく身體の運動によつて直覺像が媒介せられる段階を見たのであるが、次には逆に直覺像が身體の運動を媒介し動機づける段階を見よう。即ちクレッチュは活動快感に由來する遊戯から創造快感に動かされる藝術活動への推移について極めて意味深き記述をなしてゐる。子供は單なる活動快感から棒切れや鉛筆で無茶苦茶に引つ搔きまはす (Kritzeln) のであるが、さうしてゐるうちにその搔き痕が偶然まとまつた形をなしてゐるのを見ると記憶像が結びついて雀躍する。然るに段々この引き搔く運動と記憶像との時間は接近して來て遂には記憶像或は直覺像が引つ搔きに先立ち、それを動機づけるに到る。こゝに繪畫活動が誕生したのであつて、けものどもには絶對に見出せない轉換を成就し、よき生活を完成したのである。この人間をけものどもから峻別する創造活動 (Schöpfensende) は勿論記憶を媒介として發生(註①)した。然らば記憶は幾歲頃から成立し、如何に發展するかといふに最初の段階は感觸的な見なれた或は見なれぬといふ印象 (Bekannschafteindruck—Fremdeindruck) であつて生後六ヶ月には充分に確かめられる。第二段階は再認 (Wiedererkennen) であつて特定なものを特定なものとして想起し、第三段階は嚴密な意味での想起 (Erinnerung) であつて即ち過去の出來事の特定な聯關のなかへ一義的に位置づけるのである。第二第三は滿一年に於て既に見出される。而して繪畫創作は表現或は繪畫理解の滿一年一ヶ月より約一年

の後に到つて成立する。

註(1)

引つ掻き遊戯から創作活動への轉換はかくの如く記憶を媒介とする模寫的繪畫に進む方向の外に、裝飾的繪畫の方向がある。單なる活動快感からなされる引つ掻きから原始的な裝飾繪畫に轉換するにはたゞ一步にして足りる——勿論この小さい一步が人間をけものから峻別する所以なのであるけれども。即ち原理的には關心と快感とが活動の所産へ、引かれる線へ向け換へられればいゝのである。換言すれば直覺像が直覺像として快感と行動を動機づけければいゝのである。併しこの直覺面が感觸面を動機づけるといふことはよき生活の成立を意味するものであつて、感觸面に於て或は感觸面を中心としてのみ成立する實生活的及び遊戯的行動と原理的に構造と本質を異にする。よき生活が始めて人間を人間たらしめる。併し乍らこの裝飾的繪畫及び模寫的繪畫の二發展方向は夫々が獨立に發展したものである。即ちエル・アンドレの研究によればブッシュメンナ、エスキモ、アウストラリヤ人、北アメリカ土人等は模寫的繪畫のみをもち、マオリ人はたゞ裝飾的繪畫のみをもつのである。ウォリントンゲルは模寫的繪畫を感情移入藝術、裝飾的繪畫を抽象藝術と呼んだ。この際注意すべきことは兩者何れも直覺面を中心とする轉換をなすよき生活を實現するものではないが、前者は記憶像或は感覺像を媒介として何處までも現實的生活との原理的聯關を維持するに反して、後者はよき生活を實生活から遊離させ多分に遊戯に近づいて來てゐることである。換言すれば前者はむしろ實生活を含んで超えるに對して後者はたゞ離れ去る。嚴密に實生活に結びついたよき生活たる「言語」が前者に内面的つながりをもつことは當然でなければならぬ。たゞ何れにしても藝術が生み出さるべき所産への快感即ち創造快感に基くことを明らかにすれば足りる。實生活的慾望の満足快感は活動の後に来り、遊戯的活動快感が活動と共に成り立つに對して、藝術的創造快感はむしろ活動に先立つものである。否更に具體的に云へば記憶像及び感覺像が吾々の運動衝動をそゝり活動快感を誘つて完成快感に到達する全圓環的過程が創造快感に外ならない。故に創作過程は實に、感覺像が一旦「外なるもの」として感觸面から獨立したものを改めて純粹にその獨立性に於て承認することから出發しつゝ、逆に活

動快感を経て満足快感に到る感觸性に「内化」し、かくて外にして内なる完成快感を成立するものといふべきである。即ち創作は表現 (Ausdrücken) から出發して印象 (Eindrücken) を經る全形造過程 (Einführung) であるといはなければならぬ。この過程は次に述べるやうに「言語」成立の過程と逆方向をとつて而も互に媒介し合ふのである。

言語も亦感觸面から直覺面への轉換、即ちよき生活に於て成り立つものである。否、むしろよき生活を完成し、誕生する活動である。初生兒が誕生の瞬間から叫びを發することはヘーゲルが注意したとほりである。この叫び聲は a、ä、ö、u などの結合からなる極めて單純な發聲である。然るに追々即ち生後三ヶ月頃、前に述べた *Talmonologie* が始つてやゝ複雑な分節された發聲を見る。

この段階は最早や無意識な發聲でなく發聲活動そのものの快感から來る遊戲的發聲である。この段階を経て始めて有意義な言語が成立する。これは第一年目から第二年目に移る轉換期に見られるのである。この有意義な言語は二つの仕方で起る。第一は *Talmon* 又は模倣 (成人の言語或は自然界の音聲の) によつて得られた音結合が特定の意味とつながるに到るのであり、第二は既に長らく小兒に理解されてゐながら自ら發聲出來なかつた言葉が發音されるに到る仕方である。併しこの際注意すべきことは、この段階で成立する言語が殆んど悉く感動言語或は慾求言語 (Affekt- od. Wunschwort) であつて命名言語 (Benennungswort) ではないことである。ママといふ發聲は、お乳がほしいこと、又はだっこされたいことの表現であり、靴といふ發聲は命名でなく歩きたいことの表現である。即ちこれらの言語は多少の程度に於て動物にも見出される慾求言語に過ぎない。吾々はかゝる

言語を告知言語 (Kundgabe-Wort) とす。併し注意すべきことは同じく告知言語に過ぎぬものであつても吾々の内部状態の告知即ち飢じさとか有機感動的な感じなどを告知する言語發聲は分節が殆んどなく、外に見られ又は聽かれた物事に結びつく感動及び慾求の告知は分節された音複合たることである。前者は純粹に感觸面のみによつて成り立つ告知であるから分節がないのであり、後者は明晰に分節された感覺像によつて媒介された告知であるから發聲的にも分節が成立するのである。勿論後者の成立が *Lalmonolog* に於ける發聲遊戲によつて準備せられたものであることは斷るまでもない。後者はかくてその感動の係はる事物の直覺像に媒介されてゐるのであるから直覺像を命名する言語に極めて接近してゐるのであつて、たゞ關心が直覺像そのものに向はず少しく感觸面の方につれて直覺像と感觸との接觸點即ち小兒の位置或は境位 (Situation) に注がれるのである。即ち境位告知言語 (Situations-Kundgabe-Wort) と呼ばるべきものである。^{註(1)} 言語が單なる告知性を脱して意義 (Bedeutung) をもち、直覺像を代表 (repräsentier nach Leibniz) するに到つて始めて人間の言語、即ち真正なる言語が成立する。これは第二年中程に始まる名稱質問期 (Namenfrage-alter) 以來明確に指摘せられる。この時期にあつてはある物について注意深い直覺像が結ばれるや否や言語を、而も特定の言語を發聲する普遍的な反應傾向が支配するのであつて、新しい境位に置かれる時小兒は命名の課題を與へられたかの如く感するのである。而してこの時期が表現或は繪畫理解

(一)と創作活動の始まる時期(二)との中間期(三)に位置づけられることは理解、言語、創作の相互媒介的關係を示すものといはなければならぬ。^(註2)

註(一) 小兒は實によく感觸的に全雰圍氣を捉へ、従つて亦境位を理解する。私ところの男の子(三)は今でも、私が家を出る時支關まで出て来て「いつてまゐります」と大聲を出し、私が歸つて來ると「たゞいま」と勇ましく叫ぶ。これは決して成人の言語の單なる模倣でも、又その使ひ過まりでもない。彼は一人殘される淋しさを打ち切るために大聲を出し、ペバの歸りが嬉しくて勇ましく叫び出すのであつて、これは純然たる境位告知言語である。たまたま成人の言ひ草を逆に自らの告知言語に利用してゐるに過ぎない。

註(二) 言語は感觸的な告知言語から直覺的な寫實言語に轉換する。然るに繪畫は最初から直覺的寫實性(或は裝飾的抽象性)を擔ふのであつて、これが言語と逆方向を辿つて告知性即ち感觸性を自らのうちに含むに到る時眞實なる繪畫、藝術を成立せしめる。このことは畫家ゴッホの誕生過程を辿ることによつて確かめられる。即ちゴッホは始め愛弟テオへの手紙に於て身邊の出來事を報告するに當つて言葉では寫實出來ない直覺像を挿畫によつて實現したのである。この際彼は言語の直覺面を更に優れた直覺性を擔ふ繪畫で補つたのである。併し彼の感動告知は主として言語の感觸性に委ねてゐた。彼が挿畫としてでなく獨立した藝術として繪畫を描き始めたのはかゝる媒介の後、言語による感觸性を繪畫のうちに奪ひとることが出來た時成立した。畫家ゴッホは優れた文學作家ゴッホの愛弟への情熱を媒介としてその繪畫的止揚によつて誕生したのである。

初生兒はその倦怠性の故に自らを無分節的感觸、即ち睡りの方向にづらせて特異なる感觸的調子の新らしい成立を忌み嫌つた。然るに既に六ヶ月の乳兒は活動快感の故に出来る丈け分節した感觸的調子が互に緊張した均合ひを保つことを欲するに到つた。即ちこの際小兒は自らを新らしい感觸

的調子にまで延長し、力的緊張の全體に擴大した。更に直覺像を結ぶ感覺の段階に於ては單なる感觸に對する「外」が成立し、而もそれは言語及び創作活動によつて「内」に歸入せしめられ、従つて小兒は自らを外なるものの上に擴大した。それと同時に記憶の發展は小兒を過去に擴大し、想像の發展は未來に向つても擴大した。かくて小兒は自らを内外、前後に擴大する基礎的活動を原理的に獲得した。即ち内外、前後に互る自我の體系化活動が始められたのである。

感性發展の第三、即ち最後の段階はこの自我の體系化活動に媒介せられて成立する。アリストテレースによれば吾々の性格(*ēthos*)は活動(*enérgeia*)の所産である。吾々は今まで小兒が内外、前後に向つて活動快感に媒介せられた緊張せる活動を營み、かくて自我の體系化が始まつたことを記述した。活動に媒介された自我の擴大と體系化はアリストテレースのいふ性格即ちヘクシスの成立に外ならない。自我が擴大し體系化せられるといふことは性格の誕生、即ち自我の中心の成立を意味する。^(註1)自我のあらゆる活動はこの性格を中心として行はれるのである。故にアリストテレースの云へるが如く性格に由來する吾々の活動は單に吾々の置かれた環境的存在の力の均合即ち單なる算術的「中」(*μεσότης ἀποβύτητος*)によつて成立するのでなくて、必ず自我の中心に對する「中」(*τὸ μέσον τὸ ἰσὸς ἡμῶν*)に於て成り立つ。自我の中心即ち性格は場に於ける諸力諸動向を含みつつそれらを超えてあらゆる活動を自らに向つて決定するのである。例へば表象過程 (*Vorstellungs-Verlauf*) の如きも

のも決して機械的聯想律に従ふのでなく意志から來る決定的傾向 (determinierende Tendenz) 卽ち性格に支配せられるのである。従つて吾々の記憶の如きものも決してベルグソンの説くやうに一一の特殊的記憶像が一一の日附けをもつて神祕的な精神の座に保存せられるのではない。かゝる機械的な精神主義こそ、コフカのいへるが如く、唯物的でなければならぬ。さうではなくて記憶の座は反つて身體に(中心部は大脳皮質)宿るのであつて、而もこの身體が身體的活動に媒介されて成立した自我の中心卽ち性格に支配せられるが故に記憶像の系列は全く自然に性格からの決定的傾向による新しい獨自のゲシタルトをとるのでなければならぬ。吾々の精神に播かれた種は身體的土壤の中で性格的成長をつづけつつあるのである。かくして自我はあらゆる自我の體驗を性格的に形成しつづいよいよ獨自なる自我の中心を發展させる。自我の活動のあらゆるものは性格によつて浸され、自我の全體を宿し孕んでゐるといはなければならぬ。一定の年齢に達すれば人々は『自然なる徳』(iperna quatenus)を具へるに至るとアリストテレスがいふのはかくの如き性格の誕生によつて成人したことを指すのである。性格はかくて自我の全體に對して『原主の座』(ipsa)を占める。かゝる性格を原主とする行動によつて媒介せられて直覺像が結ばれる時吾々は吾々の性格に浸潤され盡されてゐる直覺像を地として吾々の性格によつて貫かれ得ない直覺像を型として注意の中心に置き、かくてこゝに一つの感覺の場が成立する。この場に於て注意せらるべきは先づ第一に、中心的

位置を占める直覺像は性格的原主から獨立した一つの力であり、従つて我ならぬ實在として意識される。即ちそれは單なる「外」でなく、我から獨立した實在 (Reality) の成立である。第二に吾々の關心は我ならぬ中心直覺像に集中し、而も地の直覺像は性格に浸潤され、従つて極めて感觸性流入が多い結果、明晰にして直覺的な直覺像を中心的型として流動的にして感觸的な直覺像を地とする場が成立する。吾々はこの實在的直覺像を感觸的直覺像の地の上に成り立たせる感性を知覺 (Wahrnehmung) と呼ぶ。これが感性の完成段階でなければならない。

感性の發展は初生兒の倦怠が乳兒の活動快感によつて征服せられ、更に小兒の創作快感によつて「外」なるものにも猶ほ「内」なる活動快感を發見して自我の擴大を成立させて來たのである。故に知覺の段階に於ても實在像を性格的地の感觸性によつて貫き、更には實在像のリズムを自我の創作活動によつて「内化」する方向を辿る時眞實に正常なる感性の發展完成といはるべきである。古典藝術はかくの如き知覺の展開であり、古典的人間はかくの如き知覺の世界に生きるものの謂ひである。註(2)

アリストテレスは人間丈けが宇宙とその方向軸を同じくするといつたが、古典的知覺、古典的藝術は實在、即ち宇宙のリズムを自らのリズムとして活動する。而してそれは實在意識を媒介とする覺醒の眞理態であるといはねばならぬ。アリストテレスに始められた覺醒の問題は宇宙と方向軸を同じくする古典的知覺に於て解かれた。古典的知覺、古典的藝術は、内外、前後のみならず實在

のリズムを流動する存在全體を擔ふものでなければならぬ。人間のみが宇宙と同じく直立歩行するが如く、古典的知覺のみが宇宙のリズムをかなでる。アリストテレスから始められた吾々の問ひはアリストテレスによつて與へられた答へで了らなければならぬ。

註(1) 感性の發展によつて内外、前後、及び實在に自我の體系が擴大緊張したことは、同時に自我の中心が諸力の緊張せる均合の點まで動いたことを意味すると共に、始め單に本能的に好惡の中心であつた自然的な自我が具體的活動を媒介として人間の性格に發展し、こゝに單なる自然ならぬ人間が誕生したことを物語る。小兒が自己を主張し始める所謂『計畫期』(programmatisches Alter)は自我の中心を形成する單に自然的な出發點に過ぎない。それは恰も初生兒の産聲が、人間言語の自然的端緒に過ぎざるが如きものである。性格の誕生は人間の誕生であり、性格の中心の成立は成人(Mensch-werdung)を意味するのではない。

註(2) こゝに『古典的人間』といつたのはウォーレンゲルに従つて、原始人、東洋人、ゴティク人に對立させて語つたのである。古典的知覺とは異つた知覺の構造については改めて分析する積りである。

追記。この論文は決して私の研究のオーメガをでなく、單にそのアルファを發表したものである。この研究の各々について詳しい分析と研究とが順次に發表せらるべきであることはいふまでもない。特に言語の問題及び論理の問題は知覺及び覺醒の研究にとつて必然的聯關をもつのであるから、こゝに述べられた研究は單に斷片性を脱しない。私は私の研究の斷片的アルファをここに記録したに過ぎない。